

大学開放と地域貢献

中央学院大学 土屋ゼミ
中島 武田 倉島 小嶋 永井

はじめに

私たちは共通論題の「地域と大学」から、大学とその大学がある地域との連携や協力についてテーマ設定をした。その中で大学が地域に貢献する方法にはどのようなものがあるのかを探った結果、公開講座が最も多い地域貢献の方法だった。公開講座については「大学開放」という広い視野で捉えたうえで、果たしてその方法が地域貢献に適切な方法であるのか。また、学生の地域貢献活動であるボランティア活動についても調査を行った。

I 大学開放について

「大学開放」という言葉の定義は、「何を」「どのように」「誰に」開放するものかという概念の根本的な点で事典や研究者それぞれでばらつきがあり、不明確な点はあるが、今回自分たちがこの調査において用いる「大学開放」は、「大学が持つ資源（教育、研究、人材、施設、情報）をその大学のある地域の住民、企業や自治体に対し、活動や事業を行うこと」といった社会貢献機能として扱う。

まず日本における「大学開放」の歴史についてだが、「大学開放」は戦後の教育改革で法制化された。1946 年マッカーサーの「アメリカ教育使節団報告書」が提出され、この報告書の中に「公開講座を開くことによって、大学は、正規の大学課程に入学する資格のない成人の聴講生に、刺激と教授とを与えることができるのである。（公開講座というのは、学士号を目的としない学生のための、学园内または学園外で設けられる講座を指すのである。）この計画は、大学と一般人とより密接に結びつけるという点で特に貴重であろう」と述べたそう。この報告書から翌 1947 年の学校教育法では、公開講座（69 条）、施設公開（85 条）などの制度を認めることとなり、1949 年の社会教育法でも大学等が成人の一般的教養又は専門学術知識に関する講座を開設することについて定められた。

そして 1965 年にユネスコの成人教育推進国際委員会においてポール・ラングランが提唱した生涯学習論が展開され、この理論は日本にも紹介された。生涯学習の考え方は、大学が 20 歳前後の若者だけの占有物から、すべての人に開かれた教育機会へと変わることである。従来は単発的・断続的であった公開講座を、全学を挙げて組織的・継続的な取り組みとすべく 1973 年に東北大学で大学教育開放センターが設置され、それ以降多くの大学で大学開放センターが設置された。

2005 年 1 月の中央教育審議会の答申（国の高等教育の将来像）では、大学は全体として七つの機能を有していることが掲げられ、その機能の一つとして「社会貢献機能（地域貢献等）」が位置付けられた。

Ⅱ 大学が主に行っている取り組み「公開講座」

大学開放の取り組みには様々な取り組みの形態が存在する。以下は、文部科学省が全国の大学・短期大学 1116 件に対しアンケートを実施し、その中でも特に実施した割合が多かった上位 5 項目の取り組みである。

- 公開講座の実施
- 社会人入学者の受け入れ
- 学生の地域貢献活動の推進
- 教員を外部での講座講師や助言者、各種委員として派遣すること
- 施設等を開放し、地域住民の学習拠点とすること

そしてこれらの取り組みの中での実施の有無について最も割合として多かったのが、「公開講座の実施（97.1%）」であった。先にも述べた「大学開放」の歴史から見ても、「公開講座」は昔から存在する取り組みでありメジャーな方法なのだろう。

さらに公開講座を開設する大学数のデータを見ると、その数は増加傾向にあるといえる。

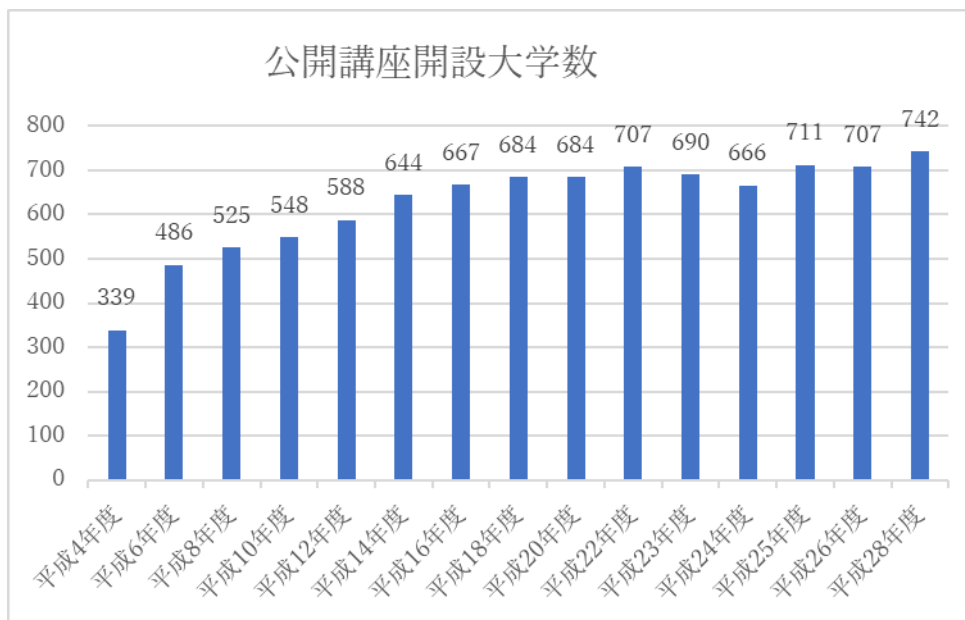


図 1

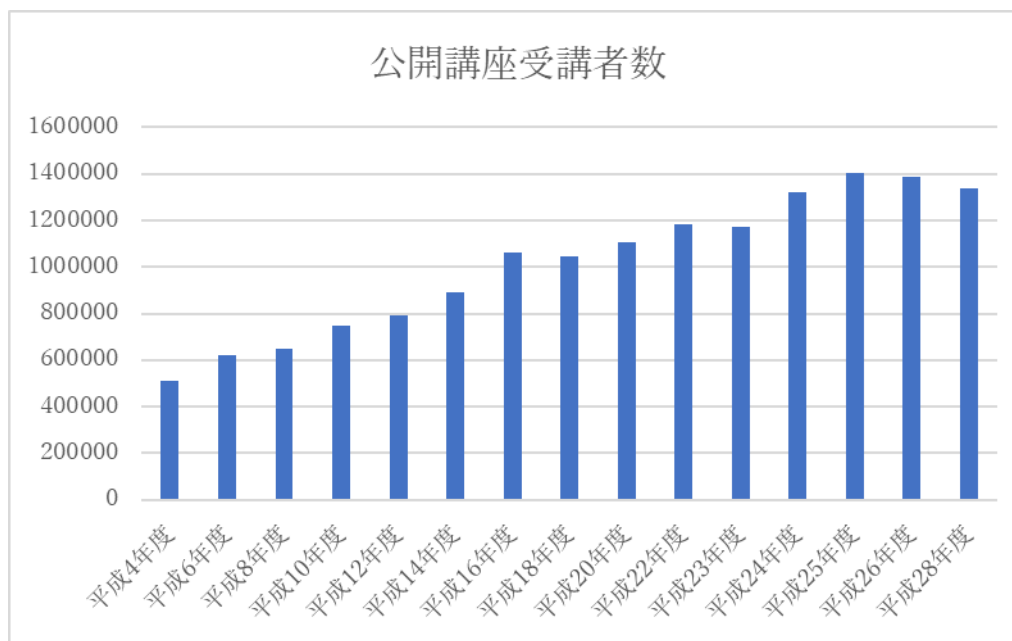


図 2

そして公開講座に参加する受講者数のデータでも全体としてみると増加傾向にあり、公開講座の受講を希望する人たちの増加に伴い、そのニーズにこたえる大学が増えていると考えられる。

では具体的に公開講座とはどのようなものなのかについて、近年の「大学による地域貢献度調査」にて常に上位を維持している信州大学を例にとり、その活動について取り上げていく。

・信州大学の公開講座

正規の学生のために開講している通常の授業を「市民開放授業」として一般市民に開放している。これは、信州大学が行う大学開放活動の一環で、信州大学の各学部や全学教育機構が開設している正規な授業を可能な限り一般市民を開放し、生涯学習に対する社会的な要請に応えるとともに、大学と地域社会の連携をより一層深めていくことを目的としたものである。さらに「信州大学市民開放授業受講生親睦会」という市民開放授業で学ぶ受講生によって構成された組織がある。ここでは会員相互の連携により啓発を図り親睦を深め、情報交換を行い楽しい集まりとし、併せて大学と連携して協力しその発展に寄与することを目的としている。では公開講座の受講者にはどのような傾向があるのかを信州大学の市民開放授業の実施状況に関するグラフから読み取る。

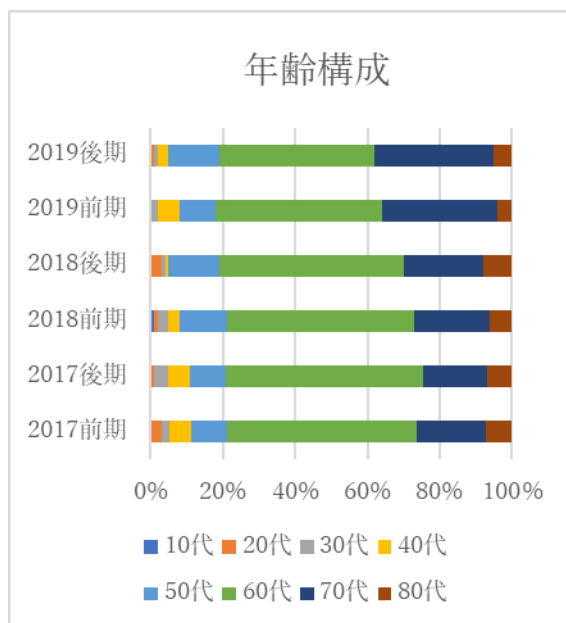


図 3

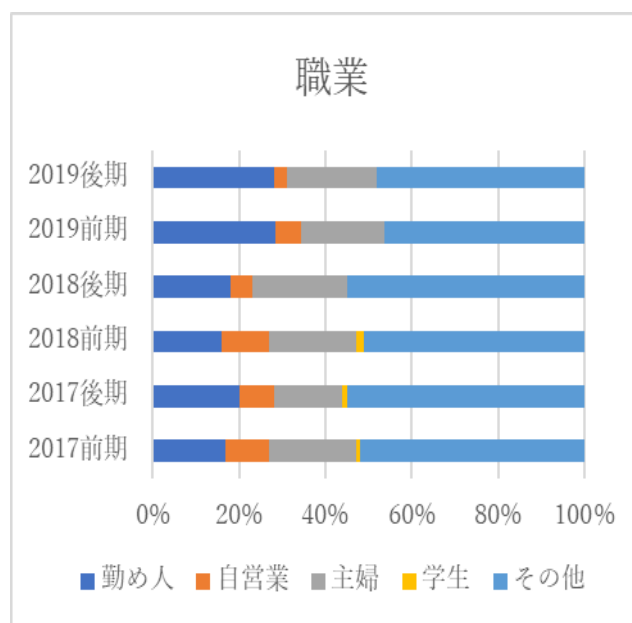


図 4

受講者の年齢構成からは60代、70代の受講者が圧倒的に多い傾向にある。そして受講者の職業に関しては「その他」を選択した受講者がどの年度でも多い傾向にあった。この二つのグラフの結果から、定年を迎えて働くことを終えた人たちが空いた時間を有意義に使うために大学の公開授業を利用していることが考えられる。また60代、70代の受講者たちの若年期は現在のような高校卒業後の約半数が4年制大学に進学する時代ではなく、進学率に世代間の不平等が存在している。若年期にできなかったことを今行う、あるいは若年期を取り戻すといった意味を持ちつつ、公開講座を受講している人もいとされている。

Ⅲ 学生ができる地域貢献「ボランティア活動」

(1) 地域貢献活動とその目的

学生にできる地域貢献は何かを考えた時に、一般的に「ボランティア活動」があげられる。そこで、私たちは学生のボランティア活動について調査を行った。

以下は、文部科学省が調査を行い把握した学生の地域貢献活動の種類とその割合を活動形態別で分けたグラフである。

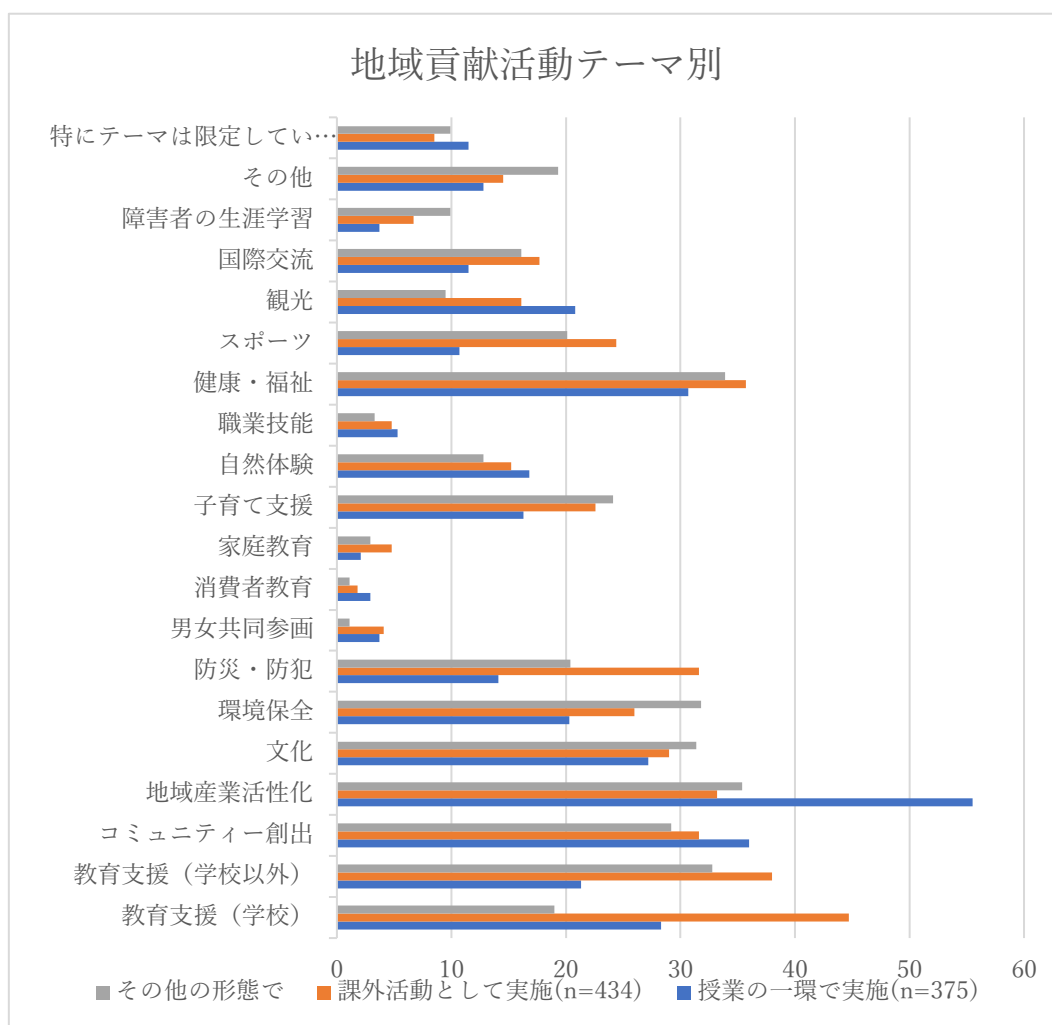


図 5

これらのことから課外活動や授業の一環として行っていることがわかった。

次のグラフは学生がボランティア活動に参加した目的に関して行ったアンケート調査結果である。

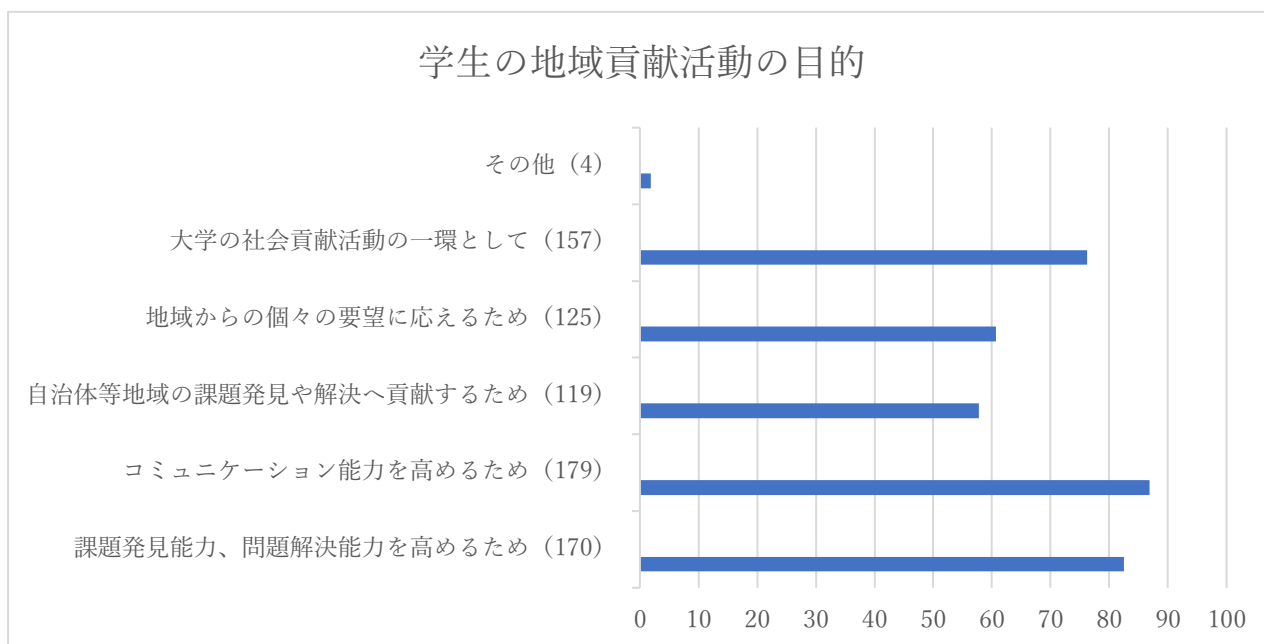


図 6

このように学生の地域貢献活動（ボランティア活動）に参加する目的で最も多かったのはコミュニケーション能力を高めることであった。

次に、具体的にどのようなボランティア活動をしているのか、私たちの中央学院大学と先程、公開講座で取り上げた信州大学のボランティア活動を述べる。また、それぞれを授業の一環としての活動と課外活動に分けて述べる。

（２）中央学院大学と信州大学の活動の比較

中央学院大学 ボランティア

単位認定

現代教養学部：地域ボランティア実践

商学部：総合講座「人間と自然」ボランティア活動体験報告会

活動内容

- ・並木小学校の子どもと遊ぶ・宿題を見るなどの学習支援補助
- ・我孫子駅ロータリーの植物の手入れ
- ・けやきプラザ「うなぎちゃん家」で調理、配膳、片付け、接客など

単位なし

手賀沼花火大会クリーンキャンペーン

柏レイソルホームタウンデー

市民のチカラまつり

産業まつり
手賀沼エコマラソン
ジャパンバードフェスティバル
我孫子市新春マラソン
小中学校において学校支援ボランティア など

・信州大学のボランティア活動

信州大学ボランティアネットワークグループ VOLNET（ボルネット）

主な活動

○ボランティア情報の発信

ボルネットに寄せられたボランティア情報をボルネットに参加している学生に拡散します。

○自らボランティア活動を行う

基本的にこのボルネットに登録している学生は「やりたいもの・興味を持ったもの」に参加してもらうという形式をとっている。

○ボランティアの発見、企画

ボルネットはボランティア活動の新しい企画を自ら生み出すことも行っており、これに対して基本的に制限はなく、ボランティア活動をする側も楽しく活動できるようにするものとして取り入れられている。

（例）小学生を対象にした「環境教育」、科学の楽しさを伝える「面白科学実験」

○令和元年台風第19号の被災地におけるボランティア活動

被災地などの災害のボランティア活動において学生たちが学修成果等を活かしたボランティア活動を行うことは将来的に学生たちが社会を担っていく力を育てる意義のあるものとされている。

○海外ボランティア

世界30カ国、約700～800ヶ所の地域で環境保護や社会福祉、学校の教師アシスタントなど、世界中から集まった学生とともに様々な活動を行うというもの

（3）「健康・福祉」に関するボランティア活動について

私たちは、今回、ボランティア活動について調査するにあたり、冒頭のテーマ別に分けたグラフにおいて課外活動で実施、授業の一環で実施、その他の形態で実施の全ての形態で実施の割合が多かった「健康・福祉」に関するボランティア活動について調査を行った。

・「健康・福祉」に関するボランティア活動を行った学生の目的

「健康・福祉」に関するボランティア活動での学生の参加目的は、論文「大学生ボランティアの教育効果および受け入れ施設への効果」 高橋恵美利・金井敏（高崎健康福祉大学講師）の大学内のボランティアの経験がある学生に対し行ったアンケート結果では、「内容に興味があった」、「自分の専門性に役立ちそうだったから」が挙げられていた。また、佐野日本大学高等学校の谷田勇人氏が行った関東の7大学のボランティア組織の学生を対象に調査を実施し、176人から有効回答を得た「福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析」では、多かった回答から順に「活動を通して学べるものがあるから」、「視野の拡大」、「人間関係の発展のため」、「やりがいのある活動をしたかった」という結果であった。どちらも、先程のボランティア活動全体においての学生の参加目的とは少し異なっており、こちらは専門的な学びや能力を養うために参加する者が多かった。

・「健康・福祉」に関するボランティア活動の活動例

「健康・福祉」ボランティアとは、一般的に社会的に弱い立場に置かれている人々に対して、生活面での支援を行う活動を指す。社会的に弱い立場とは、高齢者、障害者、子ども、シングルマザー、貧困家庭や外国人、ホームレスなどが該当する。

単位認定

○明治学院大学

ボランティアに関する科目を全学部共通科目として設定。たとえば、初年度に「ボランティア特別研究」という講義を受け、翌年度の主に夏休みを活用して、実際に2週間のボランティア活動を体験し、その内容をレポートすることで単位認定を行う。大学にボランティアセンターを設置し、学生のボランティア活動の単位取得を支援。

○フェリス学院大学

基礎教養科目として「ボランティア活動」科目を導入。単位認定対象のボランティア活動は、比較的長期にわたる国内外での活動を推奨。国内外における270時間以上の活動によって6単位の取得が可能。単発の活動は単位認定対象とせず。大学に設置されたボランティアセンターは、受入先に関する情報提供等の支援を行う。

単位なし（部活、サークル）

○桜美林大学

社会福祉ボランティア部

○川崎医療福祉大学

精神保健福祉ボランティアサークル「ゆ・ら・ぎ」

岡山県内の精神保健福祉領域の医療機関や施設で、ボランティアを行っている。

・学生のボランティア活動が及ぼす効果

○依頼側への効果

先程、「健康・福祉」に関するボランティア活動を行った学生の目的で述べた論文「大学生ボランティアの教育効果および受け入れ施設への効果」において実施した社会福祉法人、特定非営利活動法人が半数強を占める学生ボランティアの受け入れ施設を対象に実施したアンケート結果では、まず、「学生ボランティアの活動に満足したか」という問い（選択回答）に対し、96.7%が「満足した」と回答（残りは未回答）。また、「学生ボランティアが活動したことにより良かったことや得られたこと」（複数回答）では、「施設・団体の中が明るくなった」46.7%、利用者・対象者の良い変化が見られた 41.1%、「新しい風を入れてもらえた」37.8%、「新しい企画や行事を実施できた」34.4%などの回答が多かった。

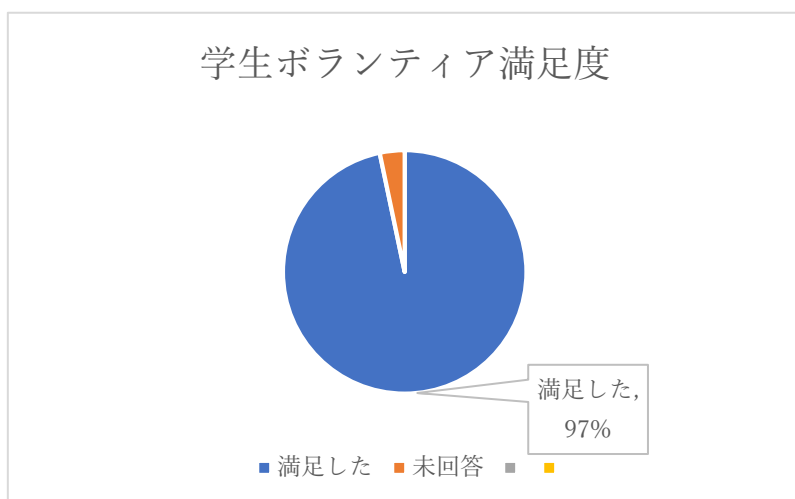


図 7

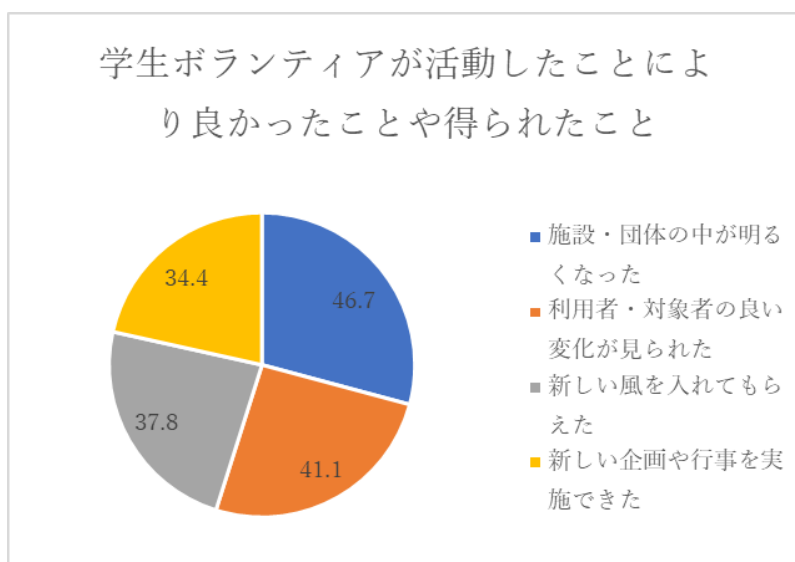


図 8

○学生への効果

同じく、論文「大学生ボランティアの教育効果および受け入れ施設への効果」で、大学内のボランティアの経験がある学生に対し実施したボランティア活動によって得たものについて聞いたアンケートでは、「物事に進んで取り組む力」、「目的を設定し確実に行動する力」、「相手の意見を丁寧に聴く力」、「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」、「社会のルールや人との約束を守る力」がそれぞれ個人差はあるが、力がついたと感じたと回答した者がそれぞれ全体の7割以上を占めていた。

よって、これらのアンケート結果では、学生のボランティア活動は地域貢献として良い効果を与え、且つ、ボランティア活動を行った学生自身も成長することができるものであるという結果となった。

また、論文「援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果」と論文「大学生におけるボランティア経験とボランティア活動に期待する成果、自己効力感、及び協調性との関連」では、ボランティア活動の効果について、「基本的には、利他的精神の高まりや、人間関係の向上などの様々なプラス効果があるが、学生ボランティアだけの強みとしては一部の自分のなりたい職業、興味のある職業について理解を深められるという点で、例えば看護師や介護士になりたいと思っているなら高齢者施設に参加したり、教員を目指すのであれば学習ボランティアとして地域の小学校に行くなどがある。学生ボランティアの活動は精神的な成長だけではなく、自分の将来についても理解を深められる。」と記載している。

これらのことから課外活動や授業の一環として行われているため、誰でも参加しやすいという点や依頼側と学生自身どちらにも効果があるという点でボランティア活動は優れていることが分かった。

IV 考察・まとめ

ポール・ラングランが提唱した生涯学習論と、その考え方が現代でも大学の「公開講座」という形で根強く残っており、図1、2の結果から今後も「公開講座」のさらなる発展が期待できるのではないだろうか。世代間の進学率の格差を感じている高齢者への学習機会の提供として大いに活用してもらいたい。しかし、高齢者のニーズに応えるだけが「公開講座」の役割ではない。高齢者の受講者が多い一方で、20代から50代の受講者は少ない現状もある。働きながら学びたい人たちへの支援する体制が整っていき、そして生涯学習の考え方にもある、すべての人に開かれた教育機会へと変化することを期待したい。

学生のボランティア活動は、依頼側への効果だけでなく、参加した学生の精神的成長をもたらし、自身の将来なりたい職業への理解をも深められるものだということが分かった。

また、ボランティア活動に関しては、調べていく中で自治体や地域住民が大学に最も期待している取り組みとして挙げられていることも分かった（『大学開放論』p.80 より）。それを踏まえると、「公開講座」を主な取り組みとしている大学と齟齬があるように感じられた。よって、そのような齟齬をなくすために大学とその地域の自治体が意見交換をできる機会を増やす必要性も感じられた。

<参考文献>

- ・ 出相泰裕編著 『大学開放論 ～センター・オブ・コミュニティ (COC)としての大学』 (大学教育出版 2014 年)
- ・ 上杉孝實 香川正弘 河村能夫編著 『大学はコミュニティの知の拠点となれるか ～ 少子化・人口減少時代の生涯学習～』 (ミネルヴァ書房 2016 年)
- ・ 現代教養学部 地域ボランティア実践
<http://www2.cgu.ac.jp/kyouin/yamada/bora0202.pdf> (11 月 9 日参照)
- ・ 商学部 総合講座「人間と自然」ボランティア活動体験報告会
<https://www.cgu.ac.jp/news/20190719-01.html> (11 月 9 日参照)
- ・ 中央学院大学ボランティア情報
<https://www.cgu.ac.jp/aboutcgu/collaboration.html> (11 月 10 日参照)
- ・ 平成 29 年度開かれた大学調査に関する調査研究 (11 月 10 日参照)
https://www.mext.go.jp/content/20200929-mxt_chisui01-100000171_1.pdf
https://www.mext.go.jp/content/20200929-mxt_chisui01-100000171_2.pdf
- ・ 「大学生ボランティアの教育効果および受け入れ施設への効果」 (11 月 15 日参照)
[04 TKEN18-TAKAHASHI.indd \(gunma-u.ac.jp\)](#)
- ・ 「福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析」 (11 月 21 日参照)
[ja \(jst.go.jp\)](#)
- ・ 厚生労働省 (11 月 23 日参照)
[スライド 1 \(mhlw.go.jp\)](#)
- ・ 桜美林大学 社会福祉ボランティア部 (11 月 23 日参照)
[社会福祉ボランティア部 | 桜美林大学 \(obirin.ac.jp\)](#)
- ・ 川崎医療福祉大学 健康保険福祉ボランティアサークル「ゆ・ら・ぎ」 (11 月 23 日参照)
[川崎医療福祉大学 - 課外活動 - 同好会 - 精神保健福祉ボランティアサークル「ゆ・ら・ぎ」 \(kawasaki-m.ac.jp\)](#)
- ・ 「大学生におけるボランティア経験とボランティア活動に 期待する成果、自己効力感、及び協調性との関連」 (11 月 23 日参照)
[KY-AA12318206-6502-03.pdf](#)

・「援助行動経験が援助者自身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られる援助成果」(11月23日参照)

[Jpn. J. Soc. Psychol. 18\(2\): 106-118 \(2003\) \(jst.go.jp\)](http://jst.go.jp/jpn/j.soc.psychol.18(2):106-118(2003))

・信州大学 市民開放授業実施状況 (11月6日参照)

<http://www.shinshu-u.ac.jp/general/extension-courses/report/>